

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 ゲーテ『親和力』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cggd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 50 回のツイキャス読書会の課題図書は、文豪ゲーテの『親和力』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

親和力 ゲーテ 読者感想文

ゲーテの小説を初めて読みました。「親和力」いうタイトルは何を意味するのだろうと興味をそそられページを捲りました。

第一部の序盤で語られた「物質の親近性」はこれから始まろうとする男女4人の人間関係を示唆するものでありました。

この4人の人間関係の中で私が一番素晴らしいと思ったのは、シャルロッテとその姪であるオットーリエの関係です。

シャルロッテ自身も結婚し妻でありながら夫の友人である大尉を愛しますが強く自制し、夫であるエドゥアルトとオットーリエのどうしようもなく引かれ合う関係を冷静に見つめ、嫉妬や独占欲で理性を欠くことなく、周囲を見守る事ができる心の強い女性です。またオットーリエも叔母と愛するエドゥアルトの間の子供が出来た事実を受け止め、自己の気持ちを昇華し乗り越え、その子供の世話に心を注ぐ事ができる献身的な女性です。この物語の中でシャルロッテの言葉は常に理性的で正しく、ともすれば読み手である私達までもが迷走する気持ちを整理し諭してくれています。

それに対してエドゥアルトは他者よりも自己愛の強い男性であると感じました。花火の時、大尉の忠告を聞かず少年が溺れたにもかかわらず花火を再開したり、子供を亡くしてしまった罪の意識から愛する人と会わないと決断し、新しい道を踏み出そうとしたオットーリエの前に不用意にも姿を見せてしまいます。全てによからぬ出来事はエドゥアルトの自制心のない行動が招いていると思いました。しかしこれこそが引き離す事が不可能な強い「親和力」であるならば、人と人、言いかえれば、物質と物質を離すしか方法がなく、二つが近づいた時ひとつになる事を回避する方法、それは死しかなかったのだと思います。死がオットーリエにとっての救いになったのでしょうか。

(おわり)

『親和力』 感想文

私はオティーリエがすべての不幸を請け負ったような気がしました。

どこか策略のような感じでエドゥアルトを好きになってしまい、またエドゥアルトもオティーリエの事を愛するようになって、本来は心から愛する事ができる人に出会えて幸せなはずなのに叶わぬ恋をしてしまって可哀想に思いました。

エドゥアルトは、シャルロツテがいるのに全身でオティーリエを愛しているという事を表現していて、土砂崩れで、怪我人がでているのに強引に花火を打ち上げたりして、愛に対して純粹で素直すぎて少しビックリしましたがそんな無邪気な所が愛される所なのかなと思いました。

オティーリエは、この愛が成就しない事は分かっていたと思うけれど、だからといってエドゥアルトへの愛を捨てることも出来ずに苦しかったと思う。会えない間悲しかったと思うけど、その間はずっとエドゥアルトと会えた時の事を想像したりもし帰った時の為にお庭をきれいにしたり、常に心の中にいるエドゥアルトを愛する事が出来て幸せだったのかな？ と思いました。

会えなくても愛する人がこの世のどこかで生きていて、その人の幸せを遠くから祈り、もし会えた時に恥ずかしくない自分でいられるように日々大切に過ごしてきたのではないのかな？ と思いました。

もう少し早く、シャルロツテが、決意してくれたら良かったのかな？ とも思うけど、生きている間には二人は許されなかったのかもしれない。

エドゥアルトとオティーリエが同じ礼拝堂に二人だけで眠ることが出来たのでようやく二人は許されたように思えて良かったなと思いましたし読んでいて救われた気持ちがしました。

(おわり)

「親和力」感想文

私は主人公のオティーリエの心の純粹さに心打たれました。彼女はエドアルトへの愛に苦しみ最後までキリスト教の教えに従ったからです。そしてとても優しい女性だと思いました。彼女がキリスト教を信じたのは、おそらく早く両親を亡くし孤児になった身の上によるものだと思います。彼女は寂しかったのだと思います。その気持ちが宗教に向かわせ、家族にしてくれたシャルロッテへの恩への苦しみから自分を罰する道を選んだのだと思います。彼女は文中で言っています。

第2章 日記帳 お墓について、、、 「みんなに愛されている者の傍らに自分もいつかは安らうようになる。一生を終えた先のことまで思案する人間にとって、何よりも心地よいものである。」

第14章 「孤独は避難所にはなりません」

第17章 オティーリエから親しい方への手紙 「私は自分の道からはずれてしまって元には戻れないのです。悪霊が邪魔をします。厳しい修道の誓いはじっくり考えて誓った人にとっては苦しい締め付けになるけれど、私は感情に迫られて誓いを立てたのです。私はここに残り、皆さんに愛されて幸せに暮らしたいので。」

もし彼女が孤児でなかったら、キリスト教がない国だったら、もっと幸せな人生を送れたと思います。

また、解説で、この物語は恋物語ではなく裏の意味が隠されていることや、登場人物やその関係、事象は様々な科学理論や研究を基にして書かれていることを知り驚きました。ゲーテは天才ですね。解説を読んでも私は意味が分かりませんでした。

(がっかり、、、)

読書会で、教えて頂けると嬉しいです。宜しくお願いします。

その他に ゲーテは、「面白いことを続けることは幸福に決まっていると言う直感の人」「国民という枠組みで社会、政治、文化を論じることを拒んだ人」とも書かれていました。買った本には他の作品も載っているので、これから読もうと思います。

(おわり)

※集英社文庫ヘリテージシリーズを買い第2部だけ読みました。

『修道院があったなら』

オットーリエは、シャルロットの赤ん坊を亡くしてしまった後、修道院に行く選択肢も学校に戻ることもしなかった。もうエドゥアルトには二度と会わないと心に誓ったオットーリエに、忍耐のないエドゥアルトは土足で踏み入ってしまった。オットーリエを最終的に死に追いやったのはエドゥアルトだ。私はそう解釈した。

少佐のシャルロットの愛し方と、エドゥアルトのオットーリエの愛し方は、それぞれの女性の行く末を明らかに左右させた。シャルロットもオットーリエも、自分の想いを抑えて自己を現実と融和させる力を持っていた。シャルロットが自分に降りかかる数奇な出来事に自身の判断を発揮しているさまは、圧巻だ。与えられた道への歩み方が能動的だし、自分の意見を持ち主体的に「生」に関わっているように思う。それに対して、オットーリエの主体性はエドゥアルトの忍耐のなさによって台無しにされたのではないか。

エドゥアルトには、オットーリエが修道院に入ったり、学校に戻って学ぶ保障をすることを認める寛大さが微塵にも感じられない。私は読みながらイライラしてしまった。修道院でも学校でも、好きにさせてやればいいのに。シャルロットの娘ルチアーネと違ってオットーリエには第三者の気持ちを推し量る力が備わっている。そこに学問が加わったらどんなにステキな女性になれたかと思うと残念で仕方がない。

シャルロットにしても、留守中にエドゥアルトの言いつけを守り、オットーリエを自分の手元から離さなかった。これは相当なエネルギーと献身が必要だったと思う。シャルロットはエドゥアルトの関係において愛の修練を積んだのだ。たった一人で。

私がシャルロットまたはオットーリエだったら？ 子どもを失った時点で即修道院に飛び込むだろう。オットーリエのターミナル期は住みなれたエドゥアルト邸での「一人修道院」だった。一年後に再び再開した、慣れ親しんだ4人の共同生活は、何の意味もなさなかった。オットーリエはせめていったんその場所を離れて、知らないところで、知らない人に寄り添ってもらって生きていく事ができればよかったのに。

オットーリエの人生に禍根が残る読書体験だった。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォー-belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『 恋の高揚、愛の忍耐そして諦念 』

「親和力」という言葉はぱっと見、「親しい・親友」のような友和的なイメージだった。ところが、物質間で化学反応が起こり、別の物質になることだった。近づくことで別な物質になることは、この小説の登場人物に当てはめるとなんだか不穏な空気を感じた。

エドゥアルト・シャルlotte夫妻は、お互いに荒波を乗り越えて、やっと平穏を手に入れたと思った矢先に大尉を受け入れるが、シャルロットの反対はもつともだ。女性は安定を何よりも好むからだ。しかし、姪のオットーリエを引き取る交換条件を出して、「親和力」の素地が完成した。結果的に、エドゥアルト・オットーリエ、シャルlotte・大尉の二組の化学反応が起きる。

私は常々、人間は「感情」の動物だと思っている。決して、内臓のように物質としての存在感はないのに明らかに存在している。それは、決して姿を見せない。たまに、エドゥアルトのように感情が発露することはあるが、大抵はコントロールできる。エドゥアルト夫妻も一番近い存在のはずなのに、心に思うことはお互いに乖離している。ゆえに、睦み事でもお互いに違う人を想うことができる。ひょっとしたら、想いが強いと赤ん坊が遺伝子的に関係ない相手に似ることもあり得るのかもしれない。感情は目に見えないからこそ、他人の悪意に知らずに流されたり、その逆もある。この四角関係もそれぞれの感情の波間に、あの湖の小舟のように揺れ続けた。

エドゥアルトはオットーリエを巻き込みながら、恋の高揚感に従う。大尉とシャルlotteは結ばれたい想いを愛に昇華させて、会わない忍耐を選んだ。恋は自らの感情が優先だが、愛は相手が優先なので「諦める」ことも必要なのだ。辛いけど。

エーリッヒ・フロムは、「愛する」ことは集中力だと言う。愛する人に集中しすぎて、本来は隠されている相手の感情が白日に晒される。それに翻弄されることが愛する悦びとするには残酷な結末がエドゥアルトに待っていた。ただ、「生きてほしい」とのオットーリエの遺言を胸に、逃げずに愛に昇華させてほしかった。武者小路実篤氏の「愛と死」の村岡のように、恋人の死後21年思い続けるこそが愛ではないか。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

「ゲーテはデーモンを描いた」

ゲーテの『親和力』を読んで伊勢物語の6段『芥川』を思い出した。

昔、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経て呼びひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに来けり。芥川といふ川を率て行きければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ」となむ男に問ひける。行く先多く、夜もふけにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥に押し入れて、男、弓、やなぐひを負ひて戸口にをり。はや夜も明けなむと思ひつつあたりけるに、鬼、はや一口に食ひてけり。「あなや」と言ひけれど、神鳴る騒ぎに、え聞かざりけり。

オットーリエが自分自身の自由を手にしようとすると、どこからともなく現れる巨大な『自然の力(デーモン)』に翻弄されてしまう。彼女の果敢なさが、鬼に喰われた女の面影に重なる。彼女もやっぱり鬼に喰われたのだ。

人をひきつけ合う自然の力が、親和力なら、人を引き離す暴力も、自然の力である。

遊苑を造るというのは、創造主に代わって、世界を創造するのに似ている。

人間は、心の奥底の無意識に繋がって生きているのではないか。人は、親和力を活かしながら、仕事と愛情によってつながり、お互いを高め合いながら、この世界を作り直そうとする。そして、いつか神に似た叡智的存在に成りおおせることを望む。

人間の意志が、世界を造り直すかにみえるころ、親和力が、人間の制御できない自然の力(デーモン)に変貌して、せっかく造り上げたものを、木っ端微塵に粉碎してしまう。

四人が協力して精魂込めた遊苑が、墓石を動かすことから始まって、動かした墓石への埋葬に終わる果敢なさが、造り上げた人工湖で、赤ちゃんが溺れ死ぬ果敢なさが。

そしてオットーリエの死の果敢なさが。

白玉か 何ぞと人の 問ひしとき つゆと答へて 消えなましものを

近代とは、人間が自然の創造主として振る舞う時代である。

人間の越権に、怒り狂うデーモンこそ、この物語の真の主人公ではないか？

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343